

で最悪（国労）の事態となったことは誠に残念で申し訳ないと思っている。  
森山欽司先生が政局多端な折り、しかも今後の活躍が切望されていた時、こつ然と逝去されたことは痛恨の極みである。この上は生前のご指導に基づき、J Rの労使関係の改善に微力を尽すことを誓い、ご冥福をお祈りする。

## 第二十二章 ミスター・ジャパニーズ・カメラ

### カメラ業界との出会い

森山は来客がソファアに座って話していると、よくかたわらのカメラに手をのばしてパチリと写真をとった。カメラの話になると、とたんに顔がほころんだものだ。一見、写真狂風だが、森山を抜きにして日本の写真工業を語ることはできない。日本の写真工業が世界に冠たる産業に発展し、信用を博しているのは森山のおかげといっても過言ではない。

日本のカメラは戦後、細々と生産を開始し「安かろう、悪かろう」の批判を浴びたが、徐々に評価を高め、ついにはカメラ先進国の西ドイツを凌駕し、世界を制覇するに至った。その日本カメラの成長、発展の立役者の一人が森山だ。

森山の事務所は千代田区一番町の「日本写真機光学機器検査協会」の中に置かれている。

森山は二十年代後半から一貫してカメラ業界の発展に尽力してきた。一時期には日本写真機工業

会、写真工業振興会、日本写真機検査協会（のちの日本写真機光学機器検査協会）という業界三団体すべての理事長、常任顧問を兼任したことがある。亡くなったその時も「検査協会理事長」の職にあった。

森山とカメラ業界との出会いはまさに偶然からだった。「検査協会」が創立満三十年を記念して五十九年に発刊した『世界の日本カメラ』という本にその間のいきさつが載っている。

「それは、一九五二年十月の総選挙で、改進黨から立候補し、二度目の当選を勝ち得た森山欽司代議士がたまたまカメラのアクセサリーを買いに、東京日本橋のワルツ商会に立ち寄ったことから生まれた。

森山氏は当時、コダックレチナやマミヤシックスなどを愛用しているカメラマニアの一人であったが、このときは、レチナのアクセサリーをかうために立ち寄ったのだという。

たまたま同商会代表取締役の一人、笠井正人氏（現コパル相談役）に出会い、いろいろ話し込むうちに、カメラ業界が物品税の引き下げ問題で運動中であることを知った。

現職の代議士である森山氏が、助力を約束するのは当然過ぎる経緯だろう。ともかく、笠井氏の紹介で、森山氏は菅原恒二郎氏（当時マミヤ光機社長）その他、当時の写真機部会幹部と次々に会談、半年足らずの間に、四〇％の物品税を三〇％に引き下げることになった……」

これが縁となって、森山はカメラ業界と深い関係を持つ。というよりは完全にカメラ業界内部の人間として、日本のカメラ業界の発展に力を注いでいくことになる。

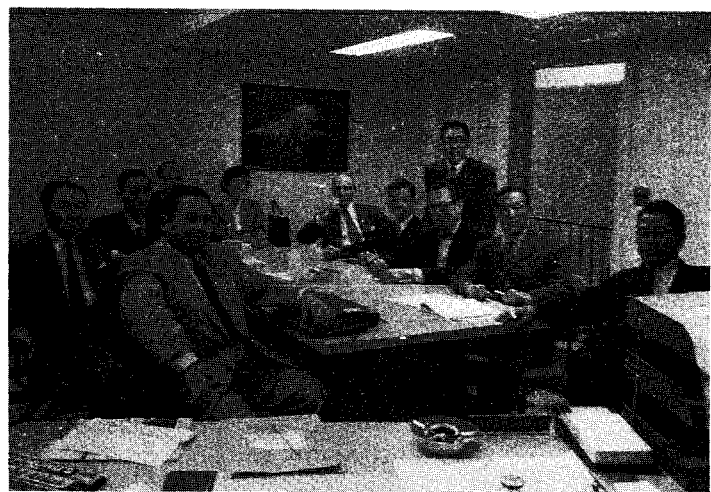
物品税の引き下げに成功し業界内部での声価を高めた森山だったが、翌二十八年四月のバカヤロ解散にとまなう総選挙では落選した。この時森山はカメラ業界からの強い要請を受けて写真工業振興会を結成し、本格的な業界活動に乗り出す。

「生産体制の分業化が遅れていたカメラ業界がようやく態勢を整え、それまで細々とまたバラバラに行っていた輸出を本格化させはじめた年です。たまたま落選中でもあったし、それではやるかということ引き受けた。もともとカメラは大好きでしたから。やりだすと熱中する性質ですから一生懸命になって考え、輸出戦略を成功させるための体制づくりをしました。その柱のひとつは国外へ不良品を出さないよう、輸出カメラの製品検査体制を民間第三者機関として作ったこと。もうひとつはニューヨークに『ジャパ・カメラ・センター』を作って海外でのPRを開始したことです」

自らが作った写真機検査協会の理事長に就任して品質管理についての体制固めをした森山は次に輸出の拡大を目指す。

戦火によって徹底的に痛めつけられた日本の産業界がようやく再生への道を歩みはじめたこのころはまた「輸出か死か」という悲壮な時代でもあった。

カメラの輸出産業化に向けてメーカー、外国バイヤー、商社が動きはじめていた。カメラ業界にとって幸運だったのは外貨不足という状況下で、ドルを稼ぐ産業として政府の認識も次第に高まってきたことである。



ニューヨークのジャパン・カメラセンターの会議室で。

昭和三十年八月、森山を先頭にした業界の「突撃隊」が日本カメラの優秀性を海外にPRするための拠点『ジャパン・カメラ・インフォメーション・アンド・サービス・センター』の設立を目的にニューヨークに乗り込んだ。この時森山はすでに同年二月の総選挙で代議士に返り咲いていたが、これこそお国のためとばかりに、それから半年の間、現地でセンター設立のために寝食を忘れて奔走したのである。

一行には当時、労働省の婦人課・国際係に勤務していた真弓も「アメリカの売春防止の実態視察」のため同行。勉強のかたわら現地で通訳兼食事係として活躍した。メンバーの中には、真弓が懸命に材料を捜し出してきて作ってくれた日本食の味が忘れられないとなつかしむものも少なくない。

「この時の経験で森山真弓はすっかり英語がうまくなりましたね。それが後に、たとえば外務政務

次官になった時などはずいぶん役立ったようです。当時はそろそろカメラの輸出がはじまっていた頃で、大手メーカーの中には海外に支店を置くところも出てきていました。もともと中小メーカーなどは無秩序に輸出している状況でね。日本でもっとも伝統があったのは日本光学でした。しかし主に軍の光学兵器を作っていたようなところでしたから、販売やPRなど考えたこともなかった。そこで一般の米国民に日本カメラの優秀性をPRしようということでもセンターを作り、僕が初代の所長になった。代議士兼所長ですよ。右も左もわからないニューヨークて一からはじめたわけだから悪戦苦闘でした。僕をはじめ日本光学の前社長の小秋元隆輝さん、現オリンパス光学社長の下山敏郎さんなどメンバーは若手ばかり、みんな使命感に燃えて仕事をしていました。いいものができたら、正しく評価してくれ」と必死にPRして回ったものです。

このカメラ・センターは日本カメラの世界制覇への道を切り拓く大きな一歩となった。その後の日本カメラの発展、浸透ぶりはいまさら語るまでもない。日本は輸出では抜群の強さを示しているが、世界を完全に席捲したカメラのような業種は他にほとんどない。

「ニコンが世界に知られるようになったのは昭和二十五年十二月、ニューヨーク・タイムズが「ニコンはドイツのカメラより優秀だ」と報じてからです。そのきっかけは朝鮮戦争に従軍した「ライフ」のカメラマン、デビット・ダグラス・ダンカンやカール・マイダナスといった一流の連中が、ニコンのレンズ、カメラを使い、その優秀さに驚いたことからだった。

そのニコンですら、四十五年ごろまで海外では「ニコン」のブランドでは売らせてもらえなかつ

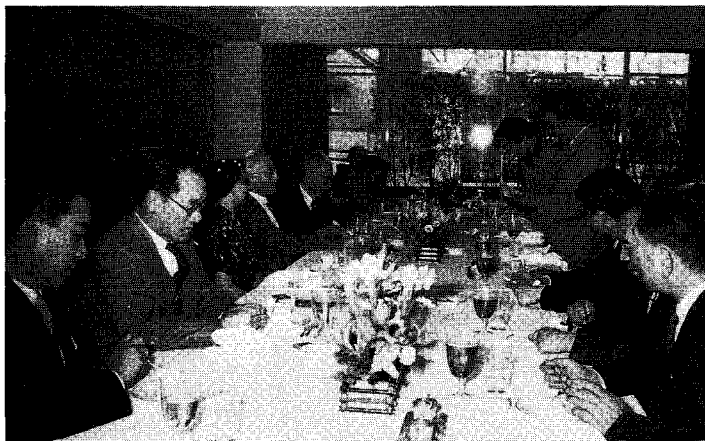
## 世界にとどろく「カメラの森山」

今日、自動車をはじめ多くの輸出産業が貿易摩擦問題に直面し、輸入制限措置を受けている中で、カメラはすでに世界の市場において不動の位置を占めている。このカメラ業界の成功の秘訣について森山はこういった。

「時代も良かった。経済力が弱い時代だっただけに先進国には「カメラぐらい大目に見てやろう」という空気がありました。それと協調の精神が大きかった。二十九年にはすでに日本写真機工業会（光学精機工業会写真機部会を改組）と日本写真機検査協会を設立した。その後も日本材料デザイナーセンターなどの共同事業をおこして競争と協調のバランスをとったことが今日を築いたのです。もう一つ、日本のカメラが西ドイツを追い越した理由は西ドイツがマイスター制度を守ったため、大量生産時代に追いつけず高額商品にとどまったことですね。量で圧倒されたわけです」

「カメラの森山」の名は国内よりむしろ海外で有名だった。海外では「ミスター・ジャパニーズ・カメラ」とまで呼ばれていたほどだ。森山は日本カメラの「顔」でもあるという。

森山の海外での評価がいかに高いかを物語るエピソードはいくらでもある。カメラの見本市として世界的に有名な「フォトキナ」は二年に一回、西ドイツのケルンで開かれる。百貨店などで開かれる日本のカメラ・ショーと違い、その展示面積、参加企業と訪れる人の数、国際性からいっても文字通り「写真の世界見本市」である。森山は三十一年に日本が初参加して以



日本のカメラの優秀性を推賞した「ポピュラー・フォトグラフィ」誌編集長ダウンス夫妻を招待し、挨拶する森山（通訳する真弓）。（昭和29年春）

た。西ドイツのツァイス・イコンと似た名前だったために断わられたのです。ようやく輸出が盛んになったと思ったら、今度は輸入制限運動が起こった。以前は西ドイツばかりではなくイギリスやアメリカにもカメラ産業がありました。そこに日本カメラの大攻勢がはじまったためアメリカでも輸入制限運動や訴訟問題が起きたのです。アメリカのメーカーは防戦のためワシントンでロビー活動を活発にやっった。しかしこの頃、日本は慢性的な輸入超過でアメリカ政府はなんとか日本の輸出を伸ばし、自立させて援助負担の軽減を図ろうとしていました。このため幸運にもロビー活動は実を結ばなかった。結局、アメリカでは三十四、五年から大進出してきた安くて優秀な日本カメラによってメーカーは次々につぶれていった。四十年前半にはほとんど全滅に近い状態になりました」（森山）



### 財団法人日本写真機光学機器検査協会

左は協会のマーク。右上は昭和62年1月まで使用。一部の国で類似ステッカーを  
使いだしたので同年2月から右下のものに変更。

「ミスター・モリヤマ」は日本の顔にとどまらず、世界のカメラ業界の重  
要人物になったわけだ。知られざる森山の一面だったといえるだろう。  
その森山が晩年自慢話のタネにしていたものがある。

「これなんですよ」  
森山がうれしそうに示したのは一枚の小さなラベルで、金色の地に黒く  
「PASSED」と印刷されている。

「これはうちの協会の製品検査証で、輸出するカメラに貼るものです。い  
わば品質保証ですね。いまではアメリカの大コダックまでがこのマークを  
欲しがるようになったのですよ。最近、日本の『チノン』というカメラ・  
メーカーがコダックに製品供給することになった。コダックほどのメー  
カーですから、検査協会のラベルなんかいらないうと思っていながら  
すが、コダックの方からわざわざ文書で「協会のマークを必ず貼ってくれ。  
その貼付位置はコダックの商標の横にしてほしい」という要望がきた。こ  
れはいまや「Passed」ラベルが単なる輸出検査済証ではなく、品質認証制  
度として定着したことを意味しているのです。コダックがアメリカで売る  
製品にまで、協会のラベルを貼れというのですからね」

森山の得意や思うべし、である。



フォトキナ開会式で、カールステンズ大統領（左端）とともに。（昭和57年10月）

来、多忙な政治日程の合い間をぬって、この「フ  
ォトキナ」の大半に参加している。四十七年の  
「フォトキナ」では開会中、世界のカメラ業界の功  
労者に贈られる「フォトキナ・ピン」を森山は日  
本人としてははじめて受賞した。またオーブニン  
グ・セレモニーでも五十三年以降は西ドイツ側主  
催者と同じテールブルが用意され、とくに五十七年  
の大会ではカールステンズ西ドイツ大統領と同席  
する栄誉を与えられた。

世界の写真小売商、ラボ関係者、写真館営業者  
写真用品製造業者、卸売業者などで組織している  
カメラ業界の総本山・PMA（フォト・マーケッ  
ティング・アソシエーション）は毎年一回、総会  
を開いている。森山はここでも五十一年、日本人  
としてはじめて業界功労者に贈られる「ホール・  
オブ・フェイム」を受け、カメラの殿堂「入り

果たしているのである。



結婚披露宴の席はもとより、いつでも、森山の手もとにはカメラがあった。  
(昭和50年5月)

ところが、森山の場合はまったく趣きを異にする。第一に森山はカメラが芯から好きだということだ。森山は亡くなるまで年間千五百ショット以上撮るカメラ・マニアだった。宴席などでも「ちよっと一枚」といってはあちこちにカメラを向けて撮りまくる。新しいカメラが発売されると即座に買い込んでその良し悪しを鑑定する。

森山の場合、まず業界があったのではない。カメラ熱が嵩じたあまり、業界に飛び込んでしまっ

くない。いわゆる「族」議員の存在がその象徴だ。しかしそのほとんどは票や金での結びつきにすぎない。お互いの利害だけで両者の関係が形成されているのである。なんらかの問題が起きて政治の力が必要になった時、政治家はその業界の利益を守るために行政や国会に働きかける。その見返りとして政治家は票や政治献金を受けとるという図式だ。



'80フォトキナの開会式で、御手洗キヤノン会長(故人・中央)と。

検査協会は「安全協会」などと違って役所からの補助金など一銭も貰わずに運営されている。カメラ業界が自腹を切って設立し、運営してきたものなのである。その検査協会の存在価値が世界で不動のものとなった。当初はチェック機関だったものが、今では逆に輸出をサポートする機能まで果たすようになった。

「検査協会もダイレギュレーション(規制緩和)の波の中で、経団連の一部から『廃止すべきだ』という声が出たこともある。『価格の千分の二・五の検査料が無駄だ』というわけです。しかしその声もいつのまにか消えました。理由は協会が補助金なしで立派に機能しているばかりか『品質保証』としての意味が海外で高く評価されているからです。そもそも業界自体が必要だといっているものをつぶせるわけがない」

政治家と特定の業界との結びつきは決して少な

たのである。

第二に、森山がカメラ業界の仕事で動く場合、政治家としての立場からではなく、業界内部の一員として考え、行動する点だ。その視点は目先の利益を追うようなものではなく、常に業界全体の発展をめざしている。その具体例も少なくない。

たとえばカラーフィルムの関税引き下げに当たって国内のフィルム・メーカーは業界の存亡にかかわると大反対した。しかし森山は「今やそんな時代ではない。競争によって国内メーカーの体質を強化していくのが本来のあり方だ」と強引に押し切り、引き下げを実現させてしまった。この結果、国内メーカーは外圧と闘う技術力、競争力を急速に磨いて、一段と発展することになった。今では世界に冠たるコダック・フィルムと正々堂々競争するに至ったのである。保護行政のみを求め一部業界はこの事実をよくかみしめるべきだろう。

カメラ業界に占める森山の地位は一般の政治家と業界団体との関係とはまったく異なる。

「政治以外の分野で社会人としての森山欽司のもっとも大きな仕事はカメラですよ」

森山自身がいうように、森山のカメラに傾ける情熱は政治家の片手間仕事の領域をはるかに越えていた。森山とカメラとの関係を端的に表現するなら「カメラ業界の中心人物がたまたま衆議院議員だった」というのが適切だろう。

## 森山欽司氏と日本の写真工業

ニコン相談役 小秋元 隆輝

終戦後間もなく復活の兆しを見せ、占領下における輸出産業として注目されたものに光学機械、特にカメラを中心とする光学工業があった。昭和二十九年、当時森山氏は若手の代議士として政界で活躍していたが、我が国のカメラ産業の将来性に着目し深く関心を持つようになった。そこでカメラの輸出振興と品質の向上を積極的に進める目的で業界に呼び掛け「写真工業振興会」を発足し理事長として活動を開始した。同じ頃、有力カメラメーカーの団体として「日本写真機工業会」が設立された。この両団体は共通の目的を推進するためにその具体的方法について頻繁に意見の交換を行った。

カメラの輸出を増大するためには、まず品質を国際的水準以上にしなければならぬ。

その頃の輸出カメラは一部には独創性のある良品質のものもあったが、海外ではドイツ製カメラの模倣と見られ、あまり評価されていなかった。しかし我が国の光学、精密技術は戦時中からかなり高い水準にあり、諸外国にひけを取らない底力を持っていたので、品

質の向上は目覚ましいものがあつたが、一部には品質的に問題のあるものが輸出されていくことは事実であつた。海外での信用を得るために有効な手段は輸出品に対して、第三者による品質保証である。既に不良品輸出の防止のために「輸出品取締法」があつた。そこで輸出カメラの検査機関として「日本写真機検査協会」が創設され、森山氏はその理事長に就任した。

当時の検査基準はカメラ業界全体のレベルも考慮されていたのであまり厳しいものではなかつたが、カメラメーカーの技術の向上と不良品の防止に大いに役立ち、海外に於ける評価も高くなつた。

さて、カメラの輸出振興で重要なことは日本のカメラ工業と、その製品を全世界に宣伝し理解を深めることであつた。当時の最大輸出国は米国で、対米輸出を飛躍的に増大するために米国にカメラのインフォメーション・センターを設置することを計画し、着々とその実現のための準備が行なわれた。森山氏は通産省をはじめとして関係団体を説き伏せ、強力なバックアップによって実現のメドが付いた。

昭和三十年八月、米国ニューヨークに「日本カメラ事務所」(Japan Camera Information and Service Center)が創設された。初代所長は森山氏、技術担当に小秋元、業務担当に下山敏郎氏が就任し、現地に赴任して開設準備に取り掛つた。その際森山真弓夫人も同行された。夫人は労働省関係の仕事が主目的であつたが、英語に非常に堪能であり、カメラ

関係にも詳しくあつたので通訳を引受けてくださった。現地における森山氏の活動は目覚しかった。最初は現地の日本カメラの代表者、ディストリビューター、小売商、報道出版関係などの一部の人は半信半疑であつたが、会合を重ねるに従つて森山氏の熱意と、周到な計画に動かされ積極的に協調参加して行動を開始した。同年十二月には「日本カメラ・ショウ」を盛大に開催して大成功を納めた後、森山夫妻は帰国された。帰国後は滞米中に得られた日本カメラの色々の情報や経験からさらに信頼性を高めるためには輸出直前の個別検査に先立って高度の特性試験である環境試験、つまり輸送中や現地での使用で、振動や衝撃、急激な温湿度の変化などに対応した品質を保証するための検査が必要だとしてその実現に努力された。環境試験を実施するための試験設備は膨大な費用がかかつたが、このような環境検査の実施によって日本製カメラが世界的に優秀であることが認識され、今日の隆盛の原因の一つとなっているのである。

昭和三十三年頃にはカメラセンターの第一次赴任者や、開設の前後に米国で活躍していたメーカーの代表者が交替のため帰国していた。森山氏はこれらの人々と「ニューヨーク会」を作り、当時の苦勞や今後の問題について話し合う機会を持つた。最初は二十人ほどのメンバーであつたが、其の後米国外からの帰国者や、輸出カメラに関係の深いメーカー、商社、出版社、関係団体などの代表者を含めて名称も「フロンティア・クラブ」と改め、年に一、二回の会合を開いた。会員数は昭和六十年には二三〇人を超え、さらに外国人で



日本カメラに功績のあったものも九人、名誉会員として入会し今日に到っている。今や日本のカメラは、品質においても、数量においても世界一の地位を確保している。いままで述べたように森山氏は戦後間もなく我が国の写真工業の将来性に着目し、ひたむきな熱情と積極的な活動によって海外進出の糸口となった「カメラセンター」と「日本写真機光学機器検査協会」の生みの親としてその功績は我が国の写真工業の歴史に永久に残るであろう。



(財)日本写真機光学機器検査協会理事長として、日本カメラ発達展に礼宮さまをお迎えしてご案内。(昭和61年7月18日)。

## 第二十三章 百年の悲願・会津鬼怒川線が通った

### 地元へも大きな功績

「最初の電車がホームに入ってくるのを見て涙が出そうになりましたよ」

昭和六十一年十月九日、栃木、福島両県にとって百年来の悲願であった野岩鉄道の「会津鬼怒川線」の開通式を回想して森山はそう語った。

森山は「田中角栄型」の政治家とは正反対のタイプだった。橋や道路の建設で目に見えるかたちの利益誘導を行ない、票とカネを集めるような政治家とは正反対である。他人の実績まで横取りし「俺がやった」といって歩く政治家が多い中で森山は逆に自分のやったことを吹聴するのが大の苦手だった。

だが、国政全体に対してはもちろんだが、地元・栃木県に対してでも森山は数々の実績を残している。決して派手ではないがいずれも栃木県、県民にとってずしりと重い実績ばかりである。森山は